

わたしたちの暮らしは、いろいろな音楽で満ちあふれています。津山藩の洋学者たちも音楽が好きだったようで、藩医の宇田川玄真は三味線が得意だったそうです。また、その養子となった榕菴も音楽には強い関心を持っていました。

天保元年（1830）、榕菴は32歳の夏に、同じ津山藩の藩士から中国で使われる笛の記譜法を習っています。しかし、思うように上達しなかったようで「私の感性は音律の高低には鋭くないようだ」と残念そうに書き残しています。

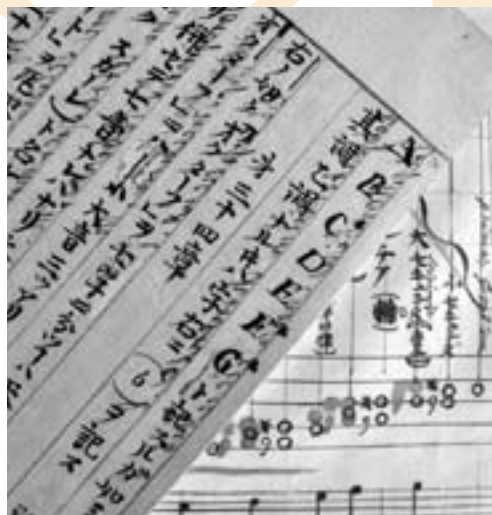
江戸時代の後期には、中国から伝わった明楽や清楽という音楽がはやっていました。榕菴が学んでいたのはこうした音楽で、月琴（げっしん）という清楽で使う楽器も好んで弾いていたことが知られています。ところが、それで終わらないのが榕菴です。演奏するだけでは飽き足らず、『清楽考』という研究原稿をまとめました。

さらに榕菴は『西洋楽律稿』などと題された数種類の原稿を書き残しています。これらの原稿を詳しく見ていくと「アルト」「バス」「メロデー（メロディ）」「オクターフ（オクターブ）」といった言葉が登場し、わたしたちを驚かせるのです。

榕菴がいつ頃から西洋音楽に関心を持ったのか、はつきりとは分かっていません。しかし、文政9年（1826）にオランダ商館長に随行して江戸へやって来たシーボルトと面会した榕菴は、その時の印象について「シーボルトは音律を理解している」と書き残しています。何か2人で音楽の話でもしたのでしょうか。あるいは、シーボルトは江戸までピアノを持参して演奏することもあった

洋学博覧漫筆

～ 榕菴と西洋の音楽 ～



▲榕菴の音楽関係資料（①津山洋学資料館所蔵、②早稲田大学図書館所蔵）

ので、榕菴にも聴かせたのかもしれない。これまでの研究によって、榕菴の原稿は、振動や音程といった音の性質や西洋と日本の音律用語の対照などをまとめていることが明らかになっています。当時は西洋の音楽を実際に耳にする機会ほとんどなかったもので、書物から得た知識で理論的な研究をしていたのでしょう。

原稿に残された音符を眺めていると、研究をする榕菴の脳裏には、もしかするとシーボルトが奏するピアノの旋律が流れていたのかもしれない、そんなふうにも思われるのです。

※透かしの家紋は右が眞作家、左が宇田川家のもの

つやま
広報
11月号
平成21年
2009
661号

編集・発行（毎月10日発行）
津山市総合企画部市長公室（市役所3階）
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
☎0868-23-2111代 ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>



「宿題やった？」うるさかろうと思いつつも確認せずにはいられない…。その日学校で習ったことを一人静かに机に向かいおさらいする。この時間は大切だ、絶対に。高らかに叫ぼう、「宿題してから遊びに行け～!!」と。（和）



取材の合間に「ダ・ビンゴ」に挑戦しましたが、まったく的に入らず。簡単なようで難しく、それでいて夢中になってしまうニュースポーツです。「一人ぐらしとその仲間会」の皆さん、ご協力ありがとうございました。（&）



つ・ぶ・や・き

編集室

芸術の秋や読書の秋など、いろいろな秋がありますが、誰にとっても嬉しいのは食欲の秋ですね。11月22・23日には「作州津山ふるさと食物流産展」が開催されます。おいしいものを食べ過ぎておなか周りが気になったら、スポーツの秋で解消を！（こ）



9月中のひとの動き

人口	108,806人	(前月比△63)
男	51,897人	(同△31)
女	56,909人	(同△32)
世帯	43,837世帯	(同+1)
転入	223人	転出 254人
出生	70人	死亡 102人
(10月1日現在)		

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクル（雑誌）にご協力ください

